

2016 年度 小委員会活動成果報告

(2017 年 2 月 10 日作成)

小委員会名	雨水活用推進小委員会		主 査 名：笠井 利浩 就任年月：2015 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (水環境運営委員会)		委員長名：羽山 広文 主 査 名：西川 豊宏
設 置 期 間	2015 年 4 月 ～ 2019 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・ グリーンインフラストラクチャーによる減災手法と効果の検討 ・ シンポジウム開催 		
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：有り		
	主査：笠井利浩 (福井工業大学) 幹事：福岡孝則 (神戸大学大学院)、屋井裕幸 (雨水貯留浸透技術協会)、大西和也 (雨水貯留浸透技術協会) 委員：神谷博 (法政大学)、村川三郎 (広島大学名誉教授)、小川幸正 (雨水市民の会)、辛勇雨 (千代田化工建設)、森孝 (三栄水栓製作所)、尾崎昂嗣 (秩父ケミカル)、向山雅之 (竹中工務店)、笹川みちる (雨水市民の会)、斉藤真紀 (ウェザーニューズ)、宋城基 (広島工業大学)、摺木剛 (丸一)		
設置 WG (WG 名：目的)	無し		
2016 年度予算	55,000 円	ホームページ公開の有無： 委員会 HP アドレス：	

項 目	自己評価
委員会開催数	12 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	無し
講習会	無し
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	1. 第 40 回水環境シンポジウム「市民のための蓄雨とグリーンインフラ」 資料名：同上 参加者数 79 名
大会研究集会	無し
対外的意見表明・パ ブリックコメント等	無し
目標の達成度 (当初の活動計画と得ら れた成果との関係)	当初の活動計画に対して月 1 回の委員会を継続的に開催し、グリーンインフラ関連の他団体との交流や情報交換を行うと共に、雨水関連のデータベース整備なども行い活動は順調に進んでいる。
委員会活動の問題点 ・ 課題	水環境運営委員会内の小委員会には、取り扱う内容の共通点が高い委員会があるため、今後連携を密にして活動を行いたい。

2016 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>当初の活動計画通り、年間 12 回（期間計 24 回）の小委員会を開催した。</p> <p>2015～2016 年度は、当委員会の 4 年間の活動計画の前半期間であり、各回の委員会では、以下の 1. ～6. の項目を中心に委員活動を展開した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 雨水活用に係る各種話題提供：委員会内外の方々から、国内外の雨水活用関連の動向や過去の経緯等について話題提供頂き、委員間で情報共有と議論を行った。この取組みを通じて、委員会の活動内容に活かす事ができた。 2. 雨水関係の法律や施策の動向調査：雨水活用に関する情報を収集・整理し、委員会内のデータベースを作成する事を目的として雨水活用関連の文献調査を行った。現在までに約 700 件の文献等が収集され、簡単な検索等が行える状態になり、今後はこのデータベースを活かした委員会活動を行う予定である。 3. 気候変動や地震等による被害状況調査と雨水活用の効果の検討：委員から、雨水活用の観点から実施した熊本地震の状況調査に関する報告があり、委員会内での情報共有と議論が行えた。 4. グリーンインフラストラクチャー（GI）による減災手法と効果の検討：GI 関連団体等との連携を行い、随時情報共有と連携に関する議論が行えた。 5. 第 40 回水環境シンポジウム開催：「市民のための蓄雨とグリーンインフラ」と題し、2017/2/25 に雨水活用と GI に関するシンポジウムを開催し、86 名の参加者があった。 6. その他関連活動：期間中、日本建築学会北陸支部福井支所シンポジウム（2017/10/14）、雨水ネットワーク全国大会、大船渡雨水タンク支援、松山雨水セミナー（松山市河原学園）、2016 年度日本建築学会大会 OS 実施および研究懇談会参加、「蓄雨」概念の一般向け PR（解説動画、パンフ作成）、ABINC との意見交換、等 <p>これまでの活動により、雨水活用技術規準内で定義された「蓄雨」の概念は広まっている。その一つとして CASBEE 川崎への蓄雨概念導入が挙げられる。</p> <p>以上より、当委員会前期の活動計画・目標に対して概ね計画通り活動が行えており、総合評価として A 評価とした。今後は、委員会外とも連携を行いながら活動すると共に、雨水活用技術規準の普及に向けた検討を行ってゆく予定である。</p>

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。